

西郷どん みーつけた♪





西郷どん みーつけた ♪

[“西郷どん追っかけ”](#)をしているオバチャン
西郷どん唯一の写真に辿り着いたのであります!?
ウッソーー!? 本当ー!?

[大久保利通in鹿児島ブログ](#)を読みやすく(?)してみようと電子書籍風にしてみました。

みやったもんせ ♪

(写真 城山西郷隆盛銅像)

2010年5月29日土曜日



西郷隆盛と大久保利通の写真

(~--)/(^~;) なんでもやねん！

オバチャンの考察 その1

西郷どん追っかけ をしているオバチャン、偶然にも西郷どんの写真に辿り着いた感があります。

歴史を知ろうとすると、あちらこちらに飛んでその繋がりを知らねばチンプンカンプンになるのです。

平野国臣と伊牟田尚平の関係を知りたくて「革命の旅人 平野国臣の生涯 森田芳雄著（新人物往来社発行）」(A本)を読んでいた。

P155に（臍の緒を切って初めての、記念撮影だけをして、京か伏見でゆっくり会おうということで別れた。）という箇所があります。

西郷どんは写真は嫌いだった・・・とか、写真はない・・・という説があるのに、この箇所から判断するに、平野国臣・西郷隆盛・大久保利通と一緒に写真を撮ったことになるのです。

ん??? これがやはり西郷隆盛の写真かも？ カモ？ 鴨？ と本をめくり、ネットを検索してみました。

そして「大西郷謎の顔 芳 即正編著（著作社発行）」(B本P113—P132)の日下藤吾氏の考察がより近いのではと考えるようになったのです。諸々の考察がな～るほど～そうかも～と思えるのです。

撮影場所は大坂薩摩屋敷または大坂の写真館あたりとオバチャンは推測するのであります。なぜなら、京か伏見で会おうということなのでそれ以外に考えられるのは大坂です。

撮影日時は1862年4月5-6日頃です。「大久保利通 中村晃著（PHP研究所発行）」(C本)によると、大久保利通は久光公と別れ1862年3月31日に下関から乗船し、4月6日夜に伏見で西郷どんと会っています。西郷どんの場合、22日に下関を出帆して27日に大坂着。30日に本田親雄の尽力で宇治万碧楼に潜伏中（「西郷隆盛年譜 山田尚二著（西郷南洲顕彰会発行）」）。下関から大坂まで5日で到着したらしい。であるからして、大久保利通は4月5日-6日に大坂薩摩屋敷にいたのでは？ と推定できるのです。上記のA本(P154-155)によると、大久保利通は密かに西郷どんと平野国臣に会っていたのです!!

“西郷群像写真”といわれている6人の武士が写っている写真がB本(1989年(平成1年)出版)にあります。

とうの昔に是非を問われていますが・・・、オバチャンの考察はこうであります。

向かって右側が平野国臣。なぜならば、日下藤吉氏が書かれているように腰にあるのは横笛と刀に見えるのです。拡大鏡で見てみたら下の方が笛(鐸がない)のように見える。他の5人は同じような羽織です。右から3人目の羽織に丸に十の字の紋が確認できます。5人は薩摩の人の可能性大。平野国臣は横笛を嗜んでいました。月照さんの入水の時も(A本P74)、真木和泉の面会の時も(A本P121)笛を吹いているのです。

右から二人目が西郷隆盛。ビコーズ、平野国臣は命の恩人です。肩に手を置かれても不思議ではないのです。

向かって左側が大久保利通。ビコーズ、B本P169に明治二年頃撮影された大久保利通と島津二兄弟の写真があります。3人の顔が上記の写真とよく似ているのです。明治という時代の島津兄弟は洋服です。大久保利通と島津兄弟は親しかったのですね。

残り3人は日下藤吾氏と同じく島津三兄弟だと思います。A本には島津三兄弟については書かれていませんが、島津三兄弟は久光公の上京に先立ち大坂薩摩屋敷にいた可能性大であります。

ちなみに司馬遼太郎の“「明治」という国家”にも“西郷群像写真”が掲載されていました。これが西郷隆盛と断定した書き方ではないようですが。

このように文字を並べたオバチャン “歴ババ”らしくなったぜよ～～(^Q^)
上記 信じる信じないは自己責任ぜよ♪

(写真 鹿児島飛行場近く西郷公園西郷銅像)



2010年6月1日火曜日

写真を写したのは誰ダ???

タイムリーといふかなんといふか、6月1日は「写真の日」だって知ってましたか～。
まだ・・結論は出てないのですが、「写真の日」にあわせて経過をUPしました。(^^;汗

(~--)/(^^;) なんでやねん！
オバチャンの考察 その2

写真を写したのは誰ダ???

“西郷群像写真”は1862年4月に撮影されたカモ・・という推測のもとで下記の本を読んでみました。

「写真術師 上野彦馬 八幡政男著（マルジュ社発行）」(E本)
「幕末維新 一写真が語る一 安田克廣編著（明石書店発行）」(F本)

○ E本による上野彦馬の足跡

1858年 長崎で写真撮影に成功する。(P42-46)

1861年早春 伊勢津藩の堀江鋤次郎とともに新器械(カメラ)をもって、江戸の藤堂高猷(のり)の屋敷に出府。(P63)

1861年9月 藤堂藩主帰国に伴い一緒に津へ行く。津藩有造館洋学所助教として教える傍ら「舎密局必携」を書く。(P68-76)

1862年 彦馬数えの25歳。「舎密局必携」刊行。藤堂高猷のはからいで文溯堂伊勢屋治兵衛版元。(P76-77)(ネット調べによると1862年正月刊行)

この年に長崎に帰ります。帰る途中に京都の蘭学者広瀬元恭に「舎密局必携」を献本する。(P77)

余談ですが、この当時 写真は藩主の余興だったそうです。(P78)

長崎帰省後、内田九一、長崎の神代延祥・野口丈一、長州防府の亀谷徳次郎、熊本の富重利平などが出入りする。津から持ち帰った人物専用のカメラ操作を彦馬に教わる。(P95-96)(←←←京都に立ち寄った時も人物専用のカメラを所持していたと思われます。)

1862年 「上野写真撮影處」看板を掲げる。(P101)

1865年 弟幸馬・内田九一 大坂に出て天満に写真館を開く。(P150)

○ F本には上野彦馬の業績が詳しく書かれています。

第1章(上野一郎氏) P29に、西郷さんの写真は「ない」と書いておられます。上野一郎氏は上野彦馬の弟幸馬の孫になります。“西郷群像写真”は掲載されていません。

因みに弟幸馬は1869年に長崎を去り、神戸に写場を出したそうです。(P12)

第3章(姫野順一氏) P73に、1858年7月に上野彦馬は興福寺の境内で良順の撮影に成功したとある。

また、P88に上野撮影局の開設は1862年11月と書かれています。

☆ ほんでもって

「写真の日」に こんなんでました～

“西郷群像写真”は内田九一・幸馬が写したのではない。(1865年1869年に長崎を出ているという説による)

がしか～し、“西郷群像写真”は内田九一の原板倉庫から出てきたそうなの。(B本P159) (～--)/(^~;) なんでやねん！ (上記の上野氏の所には無くて当然ですね)

広瀬元恭に献本した日時を調べるとヒントが見つかるかもしれませんが、4月前後だとすると上野彦馬が写した可能性も考えられます。

当時は薩摩藩士の寺田屋騒動(4/23)前の緊迫した状況です。密かに会っていたので写真のことも公にできなかったのでは？

上野彦馬の詳細年譜を探してみたいと思います。

(写真 西郷洞窟近くにあるせごどん銅像)



2010年8月10日火曜日

写真を写したのは誰ダ??? その2

上野彦馬の1862年頃の詳細年譜または決定打なる資料はまだ見つかりませぬ(気付いてないだけかも)・・・

が、オバチャンの独断と偏見でかって気ままな推察を書き連ねてみたいと思います。(^^;

幕末写真から推察してみました。

★参考図書★

「上野彦馬歴史写真集成 馬場章 編者 (渡辺出版発行)2006.7」(G本)

「日本の写真家1 上野彦馬と幕末の写真家たち 木下直之 資料篇 (岩波書店発行)1997.9」(H本)

「写された幕末 石黒敬七コレクション 石黒敬七著 (明石書店発行)1990.4」(I本)

推察したこと。

1. 背景の置物は固定ではなく移動可能と思われる。
2. 背景の置物・手置き台などは似て非なるものもあるが、同じものが複数あっても不思議でない。
3. スタジオバックで分析するのは難しいのではありますまいか～。

1. について

H本に掲載されている[6. 上田藩主松平忠礼と三人の藩士][7. 松平忠直と三人の男]でわかるように背景の置物の欄干は移動可能と思われます。例えば、大八車なんかで運べますね。

2. について

・同じくH本の上野彦馬撮影の[6. 上田藩主松平忠礼と三人の藩士][7. 松平忠直と三人の男]にみられる背景の欄干は、内田九一撮影の[18. 刀を持つ侍][21. 内田九一夫人像]の写真にもみられます。似ているようですが、ちょっと違いますね。

・I本P70の上野彦馬撮影の[No3. 彦馬の弟本庄鉄馬が写っている写真]の背景の欄干と、H本 内田九一撮影の[21. 内田九一夫人像]の背景の欄干とは似て

いますね。同じかな。

・ G本上野彦馬撮影の[60. 川上音次郎][65. 二人彦馬][91. 指輪をつけた女]に見られる手置き台と、I本P52の“西郷群像写真”に見られる手置き台とは、似て非なるものです。模様が違うのです。

上野彦馬はこのような手置き台を好んで使っていたのでは？

3. について

大八車などで移動可能ということは大坂薩摩藩邸内にスタジオバックを作ることも可能なのです。特定の写真館でなくてもよいのです。

因みに”西郷群像写真”はI本の52Pに掲載されています。石黒氏は西郷どん説ではなく、大木喬任説をとられています。

（写真 指宿市鰻温泉にある銅像）



2010年8月10日火曜日

写真を書したのは誰ダ??? その3

幕末小説から推察してみました。

★参考図書★

「大西郷謎の顔 芳 即正編著 (著作社発行)
1989. 12」(B本)

「寺田屋騒動 海音寺潮五郎著 (文藝春秋発行)
2007. 12」(J本)

「寺田屋お登勢日記 徳永信一郎 (新人物往来社) 1973. 2」(K本)

B本P117に

明治三十五年発行の「東洋日の出新聞」に、上野彦馬がこれまでに撮影した著名人に西郷隆盛の名を挙げていと書かれています。(日下藤吾氏の頁)
上野彦馬は西郷どんを撮影しているのです。

J本P256-7にある大久保利通の足跡

「三月三十日朝十時頃下関出帆 四月五日夜八時頃大坂着 大坂の藩の定宿寅屋一泊 六日早朝大坂藩邸へ行く 十時頃三十石船に乗る」

この足跡から考えるに、当時の照明では4月6日早朝から十時の間に撮影されたと考えられます。

大坂薩摩屋敷は上屋敷・中屋敷・下屋敷とあったようです。そのいずれかに臨時の写場をつくることも可能ですね。

K本P237から引用します。

(川田瑞穂という人が、彼女(お龍さん)を訪ねて写真を撮りたいというと「西郷さんとの申し合わせで、一生写真をとらないことにしている」といったが、「西郷さんの写真はありますよ」というと、それではということで一枚撮らせてくれたという)
西郷さんの写真があると書かれています。

そぎゃん、こぎゃんで・・・

★オバチャンの独断と偏見のかって気ままな推察★

1862年4月6日早朝から十時までの間、大坂薩摩屋敷(上・中・下屋敷のいずれか)に上野彦馬が臨時の写場を設けて“西郷群像写真”を撮影したのではありませんまいか～。

当時高価な人物専用のカメラを持っていたということ、1862年に大坂にいた可能性が考えられるということ、本人が西郷どんを写したと新聞に書かれていることなどから推察しました。

では、なぜに内田九一の原板倉庫に“西郷群像写真”の原板があったのでしょうか。

参考資料はありません。独断と偏見の推察です。

3年後の1865年に、弟幸馬・内田九一が大坂天満に開業するにあたり、保管しておいた背景の置物・手置き台・写真原板などを受け継いでもらうべく、開業祝いにプレゼントされたのではありますまいか～？

このように考えると諸々の謎が解けませんか

歴ババ気分のオバチャンの推察、信じる・信じないは自己責任ぜよ♪

（写真 西郷公園西郷屋敷跡にある徳の交わりの銅像）



2010年10月6日水曜日

島津兄弟が大坂屋敷にいたという資料を探して その1

(~--)/(^~;) なんでやねん！
オバチャンの考察その3

★参考図書★

「国乃礎 杉本勝二郎編 (国乃礎編輯所発行)
明治28年発行」(0本)

「西郷と久光と久保 海音寺潮五郎著 (朝
日新聞社発行)1978. 10. 10」(P本)

島津三兄弟 珍彦・忠欽・忠斉は
忠斉→忠済のようです。五男・六男・七男説がありますが、0本には第六子
安政二年三月九日生とあります。

0本P40-45が島津忠済公爵のページです。古い文体で書かれています。オ
バチャンには難しい文体であります。エライコッチャ (TT;
ここには忠済さんのことよりも父親久光公の足跡が書かれていて、P41-42に
文久2年3月上京のことが書かれています。
忠済さんは父親久光公の上京と何らかの関係があるのでここに書かれている
のかも・・・そうに違いない・・・というのがオバチャン流解釈です。(^^;
大坂薩摩屋敷にいたとすると、先発したことになりますね。

☆この「国乃礎」本は、鹿児島県立図書館の相談員の方にご協力いただきま
した。心からお礼申し上げます。m(..)m

P本P194に、岩下方平・町田久成さんが二百人の兵を率いて汽船で日向の
細島から大坂に向かい、久光公が八百の兵を率い総数千人ということが書か
れています。
忠済さんは当時満7歳ですから、陸路より海路を選んだと思われます。
久光公とは別行動の可能性ががありますね。
島津三兄弟は海路で上坂したのではありますまいか～。

(写真 西郷隆盛誕生地石碑)



2011年1月23日日曜日

島津三兄弟 → 島津二兄弟と伊藤博文 かも・・・カモ・・・鴨・・・???

ここにきて、もしかしたら・・・島津忠済と思われる人物は伊藤博文かも・・・という疑問が生まれたのです。

(~--)/(^~;) なんでもやねん！

★参考図書★

「大久保利通と明治維新 佐々木克著（吉川弘文館発行）1998. 8. 1」（Q本）

「伊藤博文 伊藤之雄著（講談社発行）2010. 2. 9」（R本）

「大西郷謎の顔 芳 即正編著（著作社発行）1989. 12」（B本）

Q本のP140の写真に伊藤博文が写っていました。

ん？この頭とおでこの形、西郷群像写真の左から二人目に似てる!! また、隣の男性より背が低い。

R本のP29に伊藤博文の身長は五尺三寸（約160. 6センチ）とある。

また、第二部飛翔編TOPにある 座っている写真も頭・おでこの形が似ているワ～と思ったのです。

B本を、まためくってみました。

P17から引用します。（大塚安子氏頁）

（写真の出所は、伊藤博文その人から博文が日清戦争の講和条約締結のため李鴻章と会談する直前、公の秘書大津氏に託したものであるという来歴が付いている・・・）

その説明によると左から二人目が伊藤博文になっているのです。

そんなわけで・・・

西郷群像写真の左から二人目の人物は
島津忠済なのか・・・伊藤博文なのか・・・

（写真 西郷洞窟）



2011年1月23日日曜日

伊藤博文の足跡

★参考図書★

「桂小五郎 古川薫著（文藝春秋発行）1984. 1
1. 25」（S本）

「伊藤博文伝 久米正雄著（改造社発行）S6. 8. 2
0」（T本）

S本P208から引用します。

（自由をとりもどした小五郎は、まず俊輔を使って、河辺から渡された斬奸状の写しを、ひそかに攘夷志士の間にばら撒いた。これは「成破の盟約」に従う最初の行動といえた。）

とあります。

坂下門外の変（文久二年一月）、水戸浪士切腹事件を譴責処分（三月十八日）後の事です。この”ひそかに攘夷志士の間にばら撒いた”が気になります。京都に”ひそかに行った”と推察できるのでは？

T本P37から引用します。

（文久二年四月、幕府から赦免された翌月、桂小五郎と俊輔とは京都に上った。）

とあります。

ちなみに五月にまた上京しているので、三月十八日から四月末の間、”ひそかに”京都まで往復したのでは？

斬奸状の写しを西郷どんに届けたのでしょうか???

そんなわけで、伊藤博文の可能性大なのです。

西郷群像写真の左から二人目は

島津忠済でしょうか。伊藤博文でしょうか。

（写真 共研公園西郷隆盛南洲翁宅地跡）



2011年12月7日水曜日

伊藤博文関係資料

★参考図書★

「寺田屋騒動 長谷川伸(改造社発行)s11.6.20」(U本)

U本P292-293から引用します。

(この報は忽ち、京阪の地に在る勤皇の志士の耳を強打した。

「長州の長井を殺せ」

・・・・・・(5行とばします)・・・・・・

「他藩士に長井を斬られては面目ない。俺達が

殺って退けよう」

久坂や桂小五郎等が長井を屠る可く起った。

久坂は、宍戸九郎兵衛と同行して、大阪の薩摩屋敷に西郷を訪ねた。)

伊藤博文は長井雅楽の暗殺に加わっています。失敗してますが。

この桂小五郎等という”等”に伊藤博文(俊輔)が含まれると考えられます。

1862年4月に”京阪にいた”ということですね。

島津忠済どんが1862年4月に”京阪にいた”という資料はいまだに見つかりませぬ。

伊藤博文の可能性が高まりつつあります。

ちなみに本日は12月7日。

西郷どんの誕生日は文政10年12月7日です。

(写真 南洲神社西郷隆盛墓)



2012年3月6日火曜日

西郷どんは複数の長州藩士と会っていた

西郷どんが1862年4月に、長州藩士の久坂玄瑞・宍戸九郎兵衛・来原良蔵・時山直八・大坂頭人等に会っていたという資料です。

★参考資料★

「寺田屋騒動 長谷川伸著（改造社発行）s11. 6. 20」（U本）

「醒めた炎 上巻 村松剛著（中央公論社）s62. 7. 25」（V本）

「来原良蔵伝 上巻 妻木忠太著（妻木忠太発行）s15. 11. 5」（W本）

「西郷と大久保と久光 海音寺潮五郎著（朝日新聞社）s53. 10. 10」（P本）

U本P293から引用します。

（久坂は、宍戸九郎兵衛と同行して、大阪の薩摩屋敷に西郷を訪ねた。）

V本P354から引用します。

（来原に長井は、時山直八を随行させた。・・・

・・・2行飛ばし・・・

大坂で来原の口上をきき、西郷は激怒した。長井の航海遠略説は朝廷を欺いて開港にもちこませ、幕府に恩を売ることを目的としていると判断したのである。

・・・9行飛ばし・・・

・・・その間に西郷は長州藩の大坂頭人、宍戸九郎兵衛と会って長井が宮廷工作に莫大な金品をつかったことをたしかめ、・・・・・・）

W本P96から引用します。

（同月晦日 君、周布正之助の東下を送りて蹴上に至る是日奥平数馬君の意気弛緩を桂小五郎に告ぐ

四月朔日 君、京都を発して伏見より乗船し翌二日大坂に至りて鹿児島藩大島三右衛門を訪ふ小河弥右衛門来たりて之に会す）

P本P175より引用します。

(すなわち西郷としては、もし久光が討幕に踏み切ることになれば、長州藩は最もよい相棒になると考えたはずです。すでに長州の精神を、西郷は下関で見て来ています。これと関係を密にしておくことは最も必要な措置と考えるのは当然です。・・・)

上記から判断するに、
伊藤俊輔(博文)も長州藩士です。西郷どんと会った可能性大と思われます。

また、
W本から、1862年3月晦日に桂小五郎は京都にいたと推定できますね。
桂の従僕である伊藤俊輔も、この時京都にいたと考えられます。

伊藤俊輔(博文)の可能性が益々高まってきました。

(写真 西郷洞窟近くのせごどん)

2012年4月6日金曜日



西郷群像写真 左から二人目を身長から推測

本日は、西郷群像写真を撮影したと考えられる文久2年(1862年)4月6日から、150年目にあたる節目の年、オバチャンの記念すべき日であります。

オバチャンのにはこの写真が 西郷どん唯一の写真だと推定しているのですが、いまいち資料不足かも・・・。

そこで、身長から考えてみることにしました。

伊藤博文 天保12年(1841年)9月2日生 1862年4月 数え年22才
島津忠欽 弘化2年(1845年)11月23日生 1862年4月 数え年18才
島津忠済 安政2年(1855年)3月9日生 1862年4月 数え年8才

ネット調べによると、
現在の小学二年生男子(満7-8才)の平均身長は120-130cmぐらいでしょうか。
そして、高校三年生男子(満17-18才)は170cmぐらいでしょうか
現在の発育状態では10年間で40-50cmの身長差があります。

忠欽さんと忠済さんは10才の年齢差です。
写真の場合、10年でこの身長差はありえないと考えられます。
まさか・・・高下駄を履いていたとは思えませんが。
幕末当時の栄養状態で想像するに
身長は、少なくとも頭ひとつぐらいの差があつていいと思われるのです。
身長から推測すると、左から二人目は”島津忠済さんではない”と考えられます。

幕末当時の交通事情で、数え年8才の子供に長期遠征は無理かも。
珍彦・忠欽さんと忠済さんは異母兄弟です。親密さはどの程度でしょうか。
そして、Wikipediaの晩年の伊藤博文公の写真の頭の形とおでこが西郷群像写真の左から二人目にそっくりくり～と思えるのです。

そんなわけで・・・オバチャンの150年目の推測は
左から二人目は伊藤俊輔(博文)になるのです。 (^.^)

(写真 西郷隆盛蘇生の家)



あとがき

(西郷群像写真は「大西郷謎の顔」芳即正編著 著作社発行)に掲載されてます。

向かって右側から、
平野國臣、西郷隆盛、島津忠欽、島津珍彦、伊藤博文、大久保利通

撮影日時場所

文久2年4月6日早朝から十時の間 大坂薩摩屋敷にて

というのがオバチャンの推定です。

かくれんぼをしていた西郷どんを、150年ぶりに“みつけた♪”
そんな気分になりました。

参考図書は図書館の相談員の方にもご協力いただきました。
心からお礼申し上げます。m(..)m

◎追記◎

平野國臣所持の笛？について

テレビで武士役の人が鰐の见えない刀の差し方をしていました。
見間違いかもしれませんが、こんな差し方もあるのかな？と思いました。
そして、

福岡市立博物館に展示してある平野國臣の笛は細くて短い笛でした。
ネット調べによる、生野書院に展示されている平野國臣の笛も細い笛です。
写真の平野國臣の腰にあるのは刀かも?と思いました。

(写真 城山西郷隆盛銅像)

★参考図書★

「革命の旅人 平野国臣の生涯 森田芳雄著 (新人物往来社発行)1970.12」(A本)

「大西郷謎の顔 芳 即正編著 (著作社発行)1989.12」(B本)

「大久保利通 中村晃著 (PHP研究所発行)2007.11」(C本)

「西郷隆盛年譜 山田尚二著 (西郷南洲顕彰会発行)1996.9」(D本)

「写真術師 上野彦馬 八幡政男著（マルジュ社発行）1986. 6」(E本)
「幕末維新 一写真が語る一 安田克廣編著（明石書店発行）1997. 3」(F本)
「上野彦馬歴史写真集成 馬場章 編者（渡辺出版発行）2006. 7」(G本)
「日本の写真家1 上野彦馬と幕末の写真家たち 木下直之 資料篇（岩波書店発行）1997. 9」(H本)
「写された幕末 石黒敬七コレクション 石黒敬七著（明石書店発行）1990. 4」(I本)
「寺田屋騒動 海音寺潮五郎著（文藝春秋発行）2007. 12」(J本)
「寺田屋お登勢日記 徳永信一郎（新人物往来社）1973. 2」(K本)
「国乃礎 杉本勝二郎編（国乃礎編輯所発行）明治28年発行」(O本)
「西郷と大久保と久光 海音寺潮五郎著（朝日新聞社発行）1978. 10. 10」(P本)
「大久保利通と明治維新 佐々木克著（吉川弘文館発行）1998. 8. 1」(Q本)
「伊藤博文 伊藤之雄著（講談社発行）2010. 2. 9」(R本)
「桂小五郎 古川薫著（文藝春秋発行）1984. 11. 25」(S本)
「伊藤博文伝 久米正雄著（改造社発行）S6. 8. 20」(T本)
「寺田屋騒動 長谷川伸著（改造社発行）s11. 6. 20」(U本)
「醒めた炎 上巻 村松剛著（中央公論社）s62. 7. 25」(V本)
「来原良蔵伝 上巻 妻木忠太著（妻木忠太発行）s15. 11. 5」(W本)